

民族誌Co-labo 100

- 2007年 4月14日 田沼幸子 (博論)
5月20日 西真如 (博論)
6月24日 木村周平
7月20-1日 ゲルゲイ、今関、西、木村、椿原、森田、田沼
9月23日 深田淳太郎
10月27日 今関光雄
12月9日 佐々木祐
1月27日 上田達
3月22日 森田良成
- 2008年 5月17日 ゲルゲイ・モハーチ
6月28日 佐川徹 (博論原稿)
9月6日 宮本万里 (博論原稿)
10月26日 西真如 (博論出版)

2009年予定 椿原敦子、高橋絵里香、吉田匡興、舟橋健太、伊東未来

総括と今後の展望

初年度に比べ、2008年度の会合回数自体は半減した。これは、予算縮小によって会合が困難になったというやむをえない事情もあるが、初年度には会合ごとに読むのが論文1,2本程度だったのに対し、2008年度は博論の提出者と商業出版の編著などの執筆者が増え、一度に読む量がかなり増えたためでもある。また、メンバーの多くは、初年度は学生だったにもかかわらず、次年度には就職したり教職を始めた者も増えた。昨年度のプロジェクト報告会の段階では、メンバーの論文執筆数も少なかったが、3名が新たに博論を書き上げ、1名が博論を商業出版に書き上げた。主催者は、民族誌的調査と記述によって思想と政治のコンフリクトを人類学的に問いなおす編著を出版した(『ポスト・ユートピアの人類学』)。また、西メンバーによる博士論文の商業出版の実現(『現代アフリカの公共性：エチオピア社会にみるコミュニティ・開発・政治実践』)と、その執筆に至る学問的議論と実務的経緯についての詳細を知る事によって、従来、博論執筆も著書出版も遠くに思っていた若手研究者もそれらを実現可能なものとして捉えるようになりつつある。両書とも、コンフリクトの人文というテーマを扱っており、本GCEOプログラムに研究として寄与するものである。昨年度よりCo-laboメンバーによる学会誌投稿論文も相次いで発表されたが、若手研究者による論文としては、格段に読みやすく、かつ、学問的水準を満たしたものとなっている。本年度はこのような調査結果と分析とが融合した民族誌的記述を、人類学にとどまらず、コンフリクトの人文という広いアリーナにおいて有効なものとしてしめしていくことに目標を置く。今年度もさらに就職による異動が増え、開催回数自体は多くはできないが、大阪大学在校生メンバーには博論執筆年に当たる者も多く、本研究会による自由闊達な議論が地を這うような調査によるデータに基づく緻密な分析によりながらも、のびやかな記述によって多くの読者にコンフリクトの実態を知らしめ、解決への希望の糸口を見いだすような民族誌的博士論文の執筆を促すことを確信している。

Co-labo メンバー (本年度所属)、昨年度業績 あいうえお順

今関光雄（成城大学民俗学研究所共同研究員）

2009「ブログ」『文化人類学事典』日本文化人類学会編、丸善。

2009「メディアとフィールドワーク」『フィールドワーカーズ・ハンドブック（仮題）』世界思想社より9月刊行予定。

伊東未来（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）

2009「イスラームにおける「聖者」概念再考——マリ共和国ジェンネのalfaを事例に」『年報人間科学』、83-100

上田達（摂南大学外国語学部外国語学科講師）

報告書等

「国民生成に関する人類学的研究——マレーシア都市村落の事例より」2008年5月
富士ゼロックス小林節太郎記念基金小林フェローシップ2006年度研究助成論文

発表等

2008 Realizing the Vision: An Anthropological Study on the Urban Kampung, Sabah, Malaysia,
The Second Joint Seminar of Faculty of Arts and Social Sciences, Universiti Brunei Darussalam (FASS UBD) and
The Institute of Oriental Culture, University of Tokyo (IOC UT) 9月16日

木村周平（京都大学東南アジア研究所）

2008 「社会の災害的編成：トルコ、イスタンブールにおける、地震災害をめぐる知識・政策および社会関係についての人類学的研究」（東京大学大学院総合文化研究科提出博士学位論文）

2009 「地震・建物・社会のネットワーク：イスタンブール都市改造計画についての人類学的考察」『アジア・アフリカ地域研究』8(2): 195-214

2009 「不安・リスク・不確実性：人類学的リスク研究への一考察」GCOEワーキングペーパー。

2009 「トルコにおける地震の記憶の活用をめぐる」GCOEワーキングペーパー。

2009 「書評『災害の人類学』」『文化人類学』73(4):617-620.

佐川 徹（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員(科学研究)）

論文など

2009 『東アフリカ牧畜社会における戦争と平和の動態——エチオピア西南部ダサネッチの民族間関係』、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文、311p。

2009 『友を待つ—ダサネッチによる「敵」への歓待と贈与』、Kyoto Working Papers on Area Studies No.48、京都大学東南アジア研究所、23p。

2009 「『いい肉』とはなにか—短角牛をめぐる生産者と消費者の葛藤」、菅豊(編)『動物と現代社会—人と動物の日本史3』、

吉川弘文館、pp. 144-166。

2009 「自動小銃は社会を無秩序化するのかー東アフリカ牧畜民の民族間関係を事例に」、『アフリカレポート』48: 35-39。

ほか英語論文3篇、書評・エッセー3篇、国際会議における発表2、国内学会における発表3、国内研究会発表2

佐々木 祐 (立命館大学非常勤講師)

『鏡の裏側』を表象するということーメキシコ・チアパス地域先住民の実践から (分科会『映像的/視覚的とは何かを再考する』)、日本文化人類学会、京都大学、2008年

2009 『イシ 北米最後の野生インディアン』(シオドーラ・クローバー、同名書)、『ライフストーリー・ガイドブック』、嵯峨野書院

2009 『文化の窮状』

(ジェイムズ・クリフォード、同名書)、『社会学ベーシックス 3・文化の社会学』、世界思想社

2009 「あらたな自立空間の創出に向かつてーサパティスタ民族解放軍Digna Rabiaから」、『インパクション』168号

高橋 絵里香 (国立民族学博物館 (学振PD))

共著

2008 「在宅介護：家族/社会という幸福の狭間で」、『人類学から世界を見る』、pp1-17、ミネルヴァ書房

論文

2008 「自立のストラテジー：フィンランドの独居高齢者と在宅介護システムにみる個人・社会・福祉」『文化人類学』73(2)、pp. 133-154。

エッセイ

2008 「魂の介護：北欧型福祉国家と教会奉仕職」、『通信』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、第122号、pp20-24。

2009 「ひとりで老いていくということ」『FIELD+』Vol.1、pp.8。

口頭発表

Erika Takahashi, 2008. 11. "The Impossibility of Independent Living: The life course of aging within the local welfare system in Finnish municipality." At Strategies for 'Aging in Place' Horiba – APRU Research Conference, Tokyo JAPAN.

Erika Takahashi, 2008. 8. "Strategies for Independence: A study of aging bodies/selves within the Finnish welfare system for the elderly." 24th Nordic Sociological Conference. Åhus DENMARK.

2008. 11、「ひとりで老いていくこと：フィンランドの場合」、『比較家族史学会』、名古屋。

2008 6、「老いていく自己と他者：フィンランド福祉制度における高齢者の身体変容」、『日本文化人類学会』、京都。

田沼幸子 (大阪大学GCOE 「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」特任研究員)

口頭発表

2008. 分科会「Rethinking the Visual」主催、日本文化人類学会第42回研究大会、6月1日、京都大学

2008. 「Visual にまつわる人類学のコンフリクトの、人類学的考察」大阪大学「コンフリクトの人文」セミナー第13回、6月13日、大阪大学

著書・論文

2008 石塚道子・富山一郎・田沼幸子共編『ポスト・ユートピアの人類学』人文書院

2008 "Yuma: Imagining utopia in post-1990 Cuba", in 'Mujeres en el Mundo: Migración, Género, Trabajo Historia, arte y política'. Yamile Delgado de Smith & María Cristina González (eds), Universidad de Carabobo, Venezuela: 177-192

椿原敦子 (大阪大学人間科学研究科博士課程後期)

「ロサンゼルスにおけるイラン人「共同体」の形成」日本文化人類学会第42回研究大会、K-1、於京都大学、2008年5月31日。

「batenからzaherへ：LAにおけるイラン人ムスリムの宗教空間の変容」平成20年度『試行的プロジェクト—若手研究者による共同研究』採択共同研究「人の移動に注目した場所・空間・景観の文化人類学的研究」（代表：市川哲）、於国立民族学博物館、2009年1月15日。

舟橋健太 (日本女子大学人間社会学部学術研究員)

『改宗』とヒンドゥー的儀礼実践—ウッタル・プラデーシュ州における『改宗仏教徒』の事例から」日本南アジア学会（第21回全国大会）、於：東洋大学、2008年9月27日

「現代北インドの仏教改宗運動におけるリーダー・フォロワー関係に関する一考察—カーストの観点から」『近現代インドの社会運動—指導者・参加者関係を再考する』日本平和学会関西地区研究会、於：龍谷大学（深草学舎）、2009年2月14日

深田淳太郎（日本学術振興会／大阪大学大学院人間科学研究科）

2009 「つながる実践と区切り出される意味：パプアニューギニア、トーライ社会の葬式における貝貨の使い方」、『文化人類学』、第73巻4号、pp.535-559

宮本万里（京都大学東南アジア研究所非常勤研究員）

論文

2009 「ブータンの変遷——依存を通じた自立の戦略——」、『東洋文化』、第89号、東京大学東洋文化研究所、3月。

2008 「森林放牧と牛の屠殺をめぐる文化の政治——現代ブータンの国立公園における環境政策と牧畜民——」、『南アジア研究』、第20号、日本南アジア学会、12月。

2009 「現代ブータンにおける開発政策と環境政治」（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文）

コラム

2009（刊行予定）宮本万里、「ブータン」、田中雅一、田辺明生(編著)、『南アジア社会を学ぶ人のために』、世界思想社。

西 真如（京都大学東南アジア研究所）

2009 『現代アフリカの公共性：エチオピア社会にみるコミュニティ・開発・政治実践』 昭和堂, 289 p.

2008 「病と共存する社会をのぞむ：エチオピアのHIV/AIDS予防運動」 武田丈、亀井伸孝編 『アクション別フィールドワーク入門』 世界思想社, pp. 204-217.

論文

2008 「住民組織によるエンパワーメントの政治実践：エチオピアのグラゲ道路建設協会の経験」『アフリカ研究』 72:17-31.

Nishi Makoto. 2008. Community-based Rural Development and the Politics of Redistribution: The Experience of the Gurage Road Construction Organization in Ethiopia. *Nilo-Ethiopian Studies* 12:13-25.

学会発表

“A Virus, Democracy, and Sustainable Humansphere: The Experience of Community-based HIV/AIDS Initiatives among the Gurage, Southern Ethiopia”, The Second International Conference of Kyoto University Global COE Program: In Search of Sustainable Humansphere in Asia and Africa, Kyoto, 9-11 March 2009.

「HIV感染者と非感染者との共存に向けた取り組み：エチオピアにおけるフィールドワークにもとづく報告」 国際開発学会第19回全国大会，広島修道大学，2007年11月22-23日。

「不一致と関与：エチオピアのグラゲ県におけるHIV/AIDS問題と地域住民の取り組み」 公開シンポジウム「人類学的リスク研究の探求」（リスク人類学研究会，グローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」），京都大学，2008年10月11日。

「ウイルスと民主主義：エチオピアのグラゲ県におけるHIV/AIDS問題と地域社会の取り組み」 シンポジウム「災害に立ち向かう地域／研究」（グローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」），京都大学東南アジア研究所，2008年7月11-12日。

ほかワーキングペーパー2、講演等2

森田良成（大阪大学人間科学研究科 博士後期課程）

口頭発表

『怠け者』たちの労働と生存—西ティモールの廃品回収人の事例、
京都人類学研究会シンポジウム「自立・連帯・生存—ネオ・リベラリズム時代の『貧困』をめぐる社会学と人類学の対話」、
（共催：京都大学GCOE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」、大阪大学GCOE「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」）、於京都大学、2008年7月26日。

「出稼ぎ農民たちの「抗議」の顛末—西ティモールの都市における廃品回収人のコミュニティ」、国立民族学博物館共同研究会「東アジア・東南アジア地域におけるコミュニティの政治人類学」（代表：平井京之介）、於国立民族学博物館、2008年7月5日。

「抗議の行方—廃品回収人と親方も衝突をめぐって」、大阪大学グローバルCOE・コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点「コンフリクト」を理解する理論的・方法論的な研究」（代表：春日直樹）、於大阪大学、2008年10月18日。

論文等

2008 「貧乏—『カネがない』とはどういうことか」、春日直樹編『人類学で世界をみる』、ミネルヴァ書房、pp.295-307

2009年（印刷中）「村人たちとストリート—西ティモールのアナ・ボトルにみる希望」、
関根康正編『ストリートの人類学』（国立民族学博物館調査報告）

吉田 匡興（桜美林大学国際学研究所）

「パプアニューギニア、アンガティヤ社会における森での神秘体験譚—接触領域としての伝統的生活空間—」 文化人類学会第42回研究大会、2008年5月30日～31日、京都大学